



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本カトリック教会旭川大町教会の聖堂とその変遷 : 北海道のキリスト教会と教会建築(その五)
Author(s)	川島, 洋一
Citation	基督教学, 26, 38-50
Issue Date	1991-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46499
Type	journal article
File Information	26_38-50.pdf



日本カトリック教会

旭川大町教会の聖堂とその変遷

北海道のキリスト教会と教会建築（その五）

川 島 洋 一

△はじめに▽

本稿は「その一～四（註1）」に引き続き、キリスト教会の伝道活動によって築かれた教会建築の形態的な視点に立って、教会組織と建築そのものの平面形・立面形（正面）の変遷を明らかにし、北海道における教会建築の歴史について考察する事を目的とする。

今回は「その四」と同様に礼拝行為（註2）をより重視するカトリック（以下旧教と略）教会について、旭川大町教会を対象として形態的変遷を明確にし、若干の考察を加える。

一、旭川大町教会の創立

北域防衛という使命を持って設置された旧陸軍第七師

団の町として急激に発展した旭川は、太平洋戦争の敗戦により、それまでの軍都から市民中心の町へと変化せざるを得なかった。戦勝国であるキリスト教国による戦後復興は、キリスト教伝道を発展させ、北海道においても各地で教会活動が活発化した。戦前から立地していた新教の四教会（組合、日基、聖公会、メソジスト）と旧教の現五条教会が中心であった旭川でも同様であった。こうした状況下で、旧教である札幌フランシスコ会は全道を六地区の宣教区とし、その一つとして昭和二十四年にフルダ管区を置き、道北地方の根拠地を旭川市に定め、翌年に聖アントニオ修道院を開設したが、現大町教会の創立過程である。

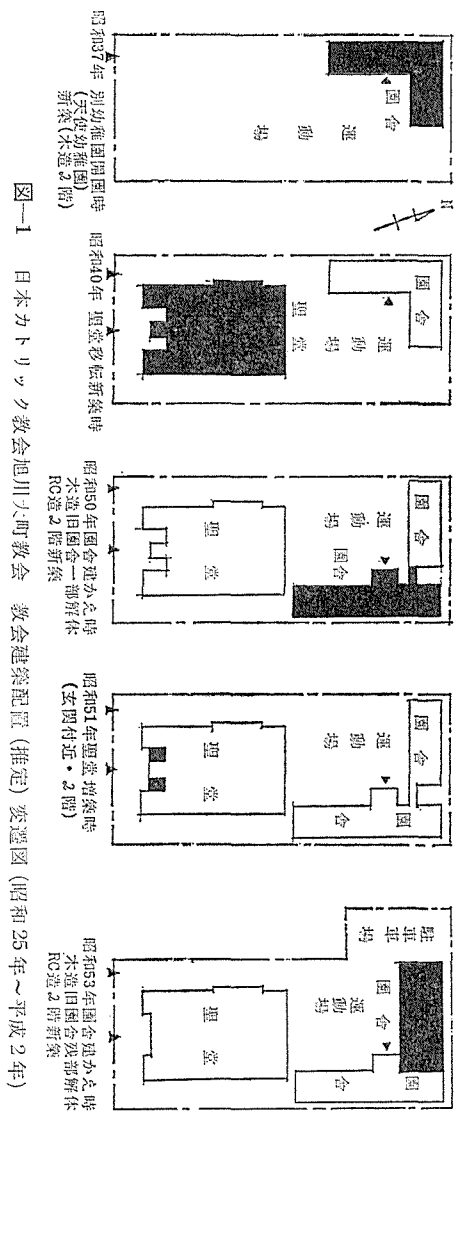
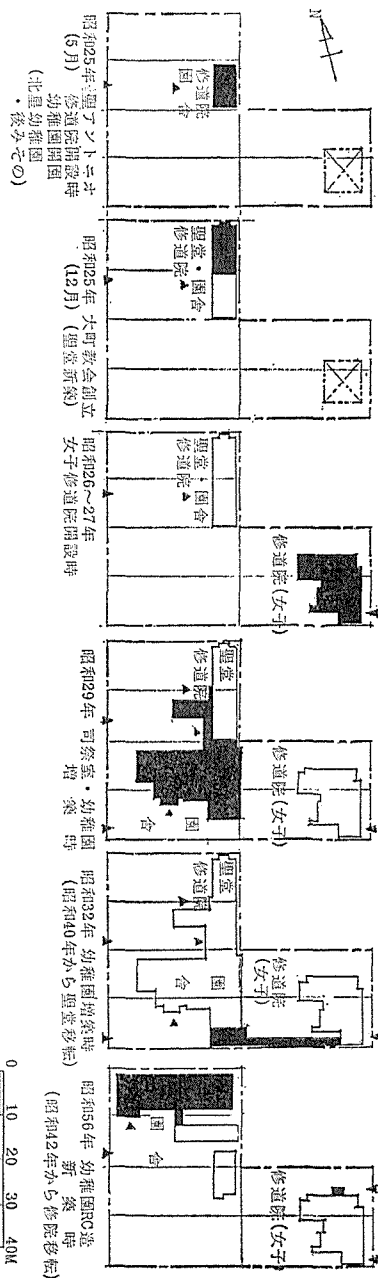
二、教会建築（聖堂）の変遷（表1・図1）

△修道院開設と仮聖堂▽ 初代地区長として任命されたルドルフ・ケルネル神父は、旭川に定住するために昭和二十五年、大町の旧敷地に建っていた木造二階建ての建物を使用して修道院を開設し、同時にこの中で教会活動が開始された。記録によると「市内大町一条五丁目家屋付き一戸分敷地借用と地続き一戸購入（註3）」とあ

表—1 日本カトリック教会旭川大町教会 教会建築床面積 (推定) 変遷 (昭和25年～平成2年)

昭和24年頃金道を一本とした札幌司教区が誕生し金道を6地区の宣教区として新しく発見、フランスス・カトリック管区は旭川を中心として道北地方を管轄
1960年7月15日作成

年 代 建築物名称	新・増・改 部 所	構造規模 M ²	変化 部分 坪	延 床 面 積				備 考			
				1 M ² 坪	2 M ² 坪	3 M ² 坪	4 M ² 坪				
昭和25年 5月 (修造後) (男子)	増 大 2 階	(購入時右記)		53.46	16.20	53.46	16.20	106.92	32.40	昭和24年一ツラフランス修道院ツルギ地区として道北地区・地区長居住・敷地増築 【敷地】 市内大町1条5丁目家賃付き1戸分敷地増築と地権者一ツの分譲入 【建物】 信徒の生活で必要とされる経緯で敷地を2棟に増築し、この分譲入は保衛所・市立女子修道院開設 (五月・2階を修造後小倉下の二階事務室後修造後) (増みその幼稚園) 開園 (一階部分改修・国庫22人)北星幼稚園 築くこじんまりとした教区感あふれる変遷	
昭和25年 12月 初年度 ・修築後	新 大 2 階	1F 計 2階 計	63.21 128.39	19.78 38.91	118.67	35.96	116.64	35.35	235.31	71.31	初年度建築 ・ 舊の売り家購入し管区長館とする ・ 昭和27年幼稚園のための敷地をスターが使用し今日に至る
昭和26年 ～27年 ・初年度 ・修築後	増 大 2 階	1F 計 2階 計	167.82 203.35	50.85 61.62	266.49	86.82	152.18	46.12	433.67	132.93	
昭和28年 ・修築後	増 大 2 階	1F 計 2階 計	32.40 47.79	9.92 14.48	334.28	101.30	152.18	46.12	486.46	147.41	神父の部屋は8畳の居室を改造し壁を4分の3取りの柱で仕切られ狭い個室風の入り所も宿舎を4～5人が入れれば一杯になる。
昭和29年 ・修築後 男女 男女	増 大 2 階	1F 計 2階 計	629.16 683.04	190.65 202.44	793.98	241.51	35.54 地下 38.63	19.54 地下 11.78	871.40	264.06	ドミニコ神父によって大町1条10丁目 (昭和29年開園天彦幼稚園敷地内) に増築・市立幼稚園建築 (幼稚園が築く又建築物の受け入れが主な原因) 【敷地】 市立幼稚園建築 (幼稚園が築く又建築物の受け入れが主な原因) 【建物】 市立幼稚園建築 (幼稚園が築く又建築物の受け入れが主な原因) 【敷設】 市立幼稚園建築 (幼稚園が築く又建築物の受け入れが主な原因) ・ 室後修造後 (増みその幼稚園) 開園 (一階部分改修・国庫22人)北星幼稚園 築くこじんまりとした教区感あふれる変遷
昭和31年 ・修築後 女子舎	増 大 2 階	1F 計 2階 計	21.60 97.20 116.80	6.55 29.45 36.00	818.53	243.05	132.74 地下 38.58	40.22 地下 11.78	930.20	300.08	冬増れ増築とホールの一階化のための便所位置移動及び司祭室への動線確保のため
昭和32年 ・修築後 現幼稚園	増 大 2 階	1F 計 2階 計	4.86 203.95 208.21	1.47 63.06 63.06	823.44	243.53	132.74 地下 38.58	40.22 地下 11.78	955.06	301.53	現みその幼稚園新築 (併設・昭和30年) 時に増築された推定修造後幼稚園への動線確保のためと増築



図一1 日本カトリック教会旭川大町教会 教会建築配置(推定)変遷図(昭和25年~平成2年)

り、また建物については「信徒の世話で木造モルタル二階建家屋購入（註同）」また「古賀さん経営の洋装学校と保育所として使用されていた（註同）」との事で、復元された延床面積によると約三十二坪となり、恐らく当時としては一般住宅より大きな建物であり、又教室的な平面形であったために、この建物としたのであろう。また幼稚園も同時に開園されて、地域への間接的な布教活動も展開し、旭川市での旧教の布教活動は、五条教会と大町教会の二教会が担当する事となった。

△初期聖堂▽ 仮聖堂として出発した建物は、修道院・礼拝室また保育室としての複合された機能を持っていたので手狭であり、開設後すぐに本格的な聖堂建設に着手した。そして七カ月目の昭和二十五年十二月には仮聖堂の北側に礼拝堂（一階）と修道院（二階）の木造二階建てが増築された。復元によると、延床面積は約七十一坪となり規模的には二倍となって、三つの機能が明確に分離した教会建築となった。

△旧聖堂▽ 布教施設の充実は、昭和二十年代後半のキリスト教ブームを背景として、多くの教会では会堂の増改築が至上命令的に行なわれた。また戦後における幼児教育の発展は急激な人口増に対応しなければならず、

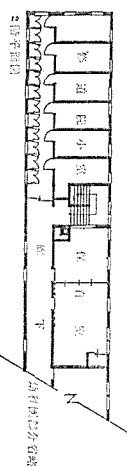
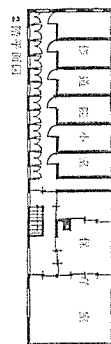
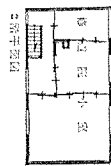
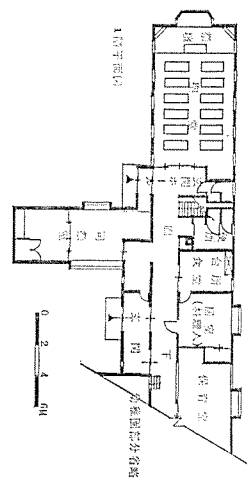
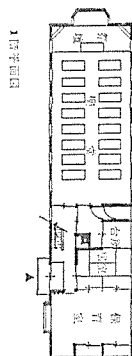
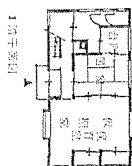
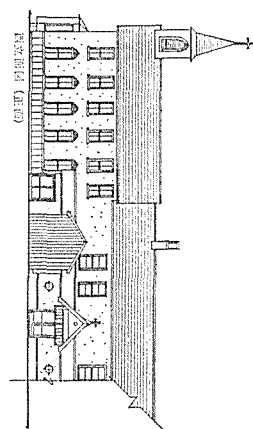
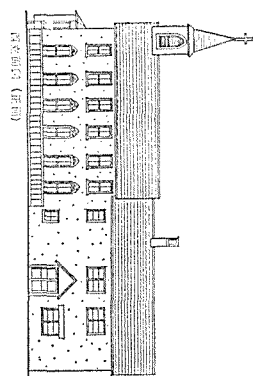
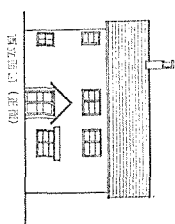
幼稚園施設の充実が急務となり、こうした状況の中で昭和二十九年には、保育室確保と司祭住居の充実を行い、初期聖堂の南側に木造二階建ての園舎及び西側に司祭室棟を増築して、長い正面形を持つ教会建築となった。床面積は約百四十七坪となって、初期聖堂の二倍の規模に拡大された。

△前聖堂▽ こうして教会建築の増築が規模的には倍々という面積拡大のもとで行なわれたが、仮聖堂立地からの借地はいぜんとしては正されなかった。この事情から昭和四十年には、新しい敷地である大町一条十丁目に移転増築が行なわれ、鉄骨平家延床面積約二百坪の聖堂が建てられた。別棟女子修道院と合わせると約二百七十坪という初期聖堂と比べると床面積が四倍弱の規模になった（先に同敷地に移転していた付属幼稚園は含まず）。△現聖堂▽ 新築の聖堂はそれまでの木造建築と異なり種々な点で合理的な建物であったが、昭和五十一年に便所位置の変更（水洗化）によって、冬期礼拝室と集會室（台所含）を一体化し、玄関両側に便所洗面と事務室を増築した。また、正面側小屋裏を集會室として改築して一部二階建てとなって今日に至っている。

昭和25年(5月) 舊入 修道院図面

昭和25年(12月) 新築 初期聖堂図面

昭和29年増築 旧聖堂図面



三、五棟の教会建築・聖堂

△仮聖堂の建物(図2)▽ 布教初期の仮聖堂については、残されていた資料・写真及び聞き取り調査によって復元図を作成した(註4)。切妻屋根平入りの総二階建てで、外壁はモルタル仕上げであったが、この建物が建設されたと考えられる昭和二十一～二十二年頃は下見板であり、その後記録にあるモルタル仕上げになったと推察する。平面形では片廊下形式で南側には五坪程度の広い部屋があり、この部屋が教室的に使用されて仮聖堂の機能をなんとか保っていたと思われる。

△初期聖堂の建物(図2)▽ 開設すぐに建設された建物は、仮聖堂をそのまま使用し北側に増築するという手法で実施され、木造総二階建て切妻屋根で塔屋を付設した建物の出現となった。外観では教会建築としての意匠が用いられ、平側外壁には二階に連続するスリット状上げ下げ窓が配列し、特に一階部分の窓上部には尖塔アーチが付設されていて、石造教会建築の手法が見られた。また棟北端に置かれた方形屋根の尖塔上には十字架が置かれ、教会の存在を明確にしていた。仮聖堂部分には変化がなく、増築部分と合わせて長い平側が正面形と

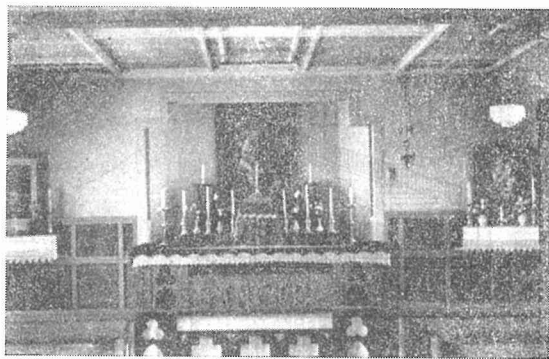
なった。

増築の平面形では一階に礼拝室を配置し、北側壁面すべてを祭壇(写真1)とし、中央通路左右に信徒席を置き対面式となっていた。また二階

は西側の片廊下式で東側に

個室が配置されていて、修道士の生活空間となっていた。廊下側外壁面には奥行のある収納棚が置かれ、修道士のわずかな持ち物が収納され、また各個室は間口が狭い平面形で、内部には簡易的なベットと机そして壁面のハンガー掛けが備えられた、質素な空間となっていた。

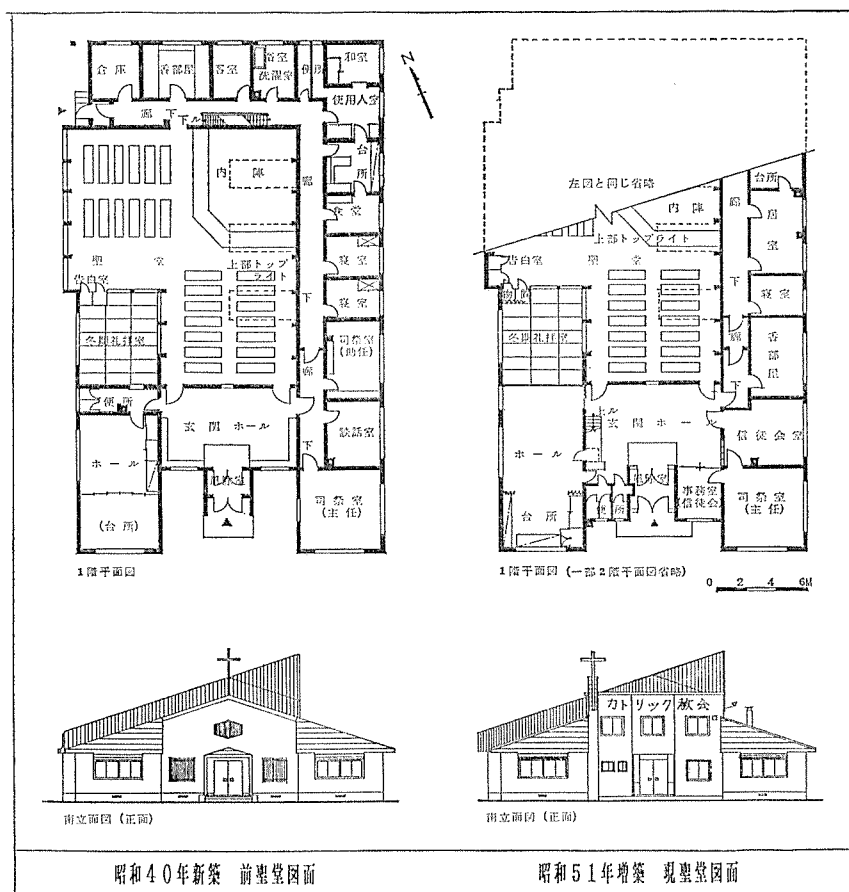
△旧聖堂の建物(図2)▽ 昭和二十五年末には初期聖堂の南側に木造二階建棟と平家の司祭室棟、更に幼稚



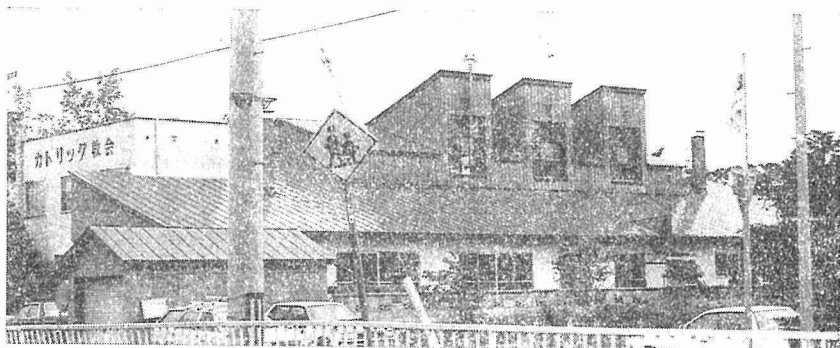
写真一1 旧聖堂内部正面祭壇
(初期聖堂同じ、昭和25年建設)

園の遊戯室棟を増築し、本稿ではこの時点での建築を「旧聖堂」とするが、外観においては、初期聖堂部分の正面平側に玄関拡大のための下屋と、その小屋根棟に置かれた十字架、また増築司祭棟の妻側壁面の出現等であった。平面形では玄関部分とT字型に配置された司祭室部分が増築され、改築では司祭の生活を補助する使用人の空間としての食堂と使用人室の出現であった。

△前聖堂の建物（図3）▽このように、仮聖堂は数回の増改築

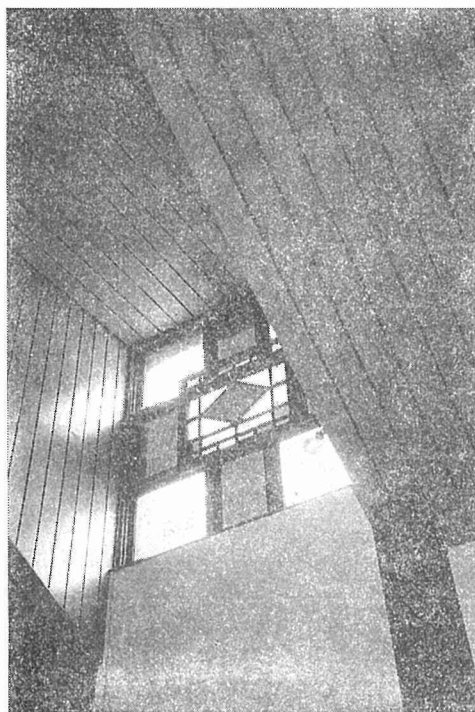


図一3 日本カトリック教会旭川大町教会 教会建築平面・立面変遷 復元・実測図 (2) (昭和40年～平成2年)



写真—2 現教会建築東側外観 (平成2年撮影)

により初期聖堂・旧聖堂となって、平面・正面形態が種々に変化してきたが、大町教会にとって最も大きな教会建築上での変遷は、移転新築時に建設された鉄骨



写真—3 現聖堂内部トップライト
(平成2年撮影)

造平家の聖堂であった。前聖堂の建設はドミニコ神父の時に実施され、設計はスイス人ベトレム会フロイラ神父が担当した。記録によると「構造はH型钢鉄骨構造し型形式変則船底天井、桧の桁材。仕様は壁色彩ガラスウォール貼り、司教司祭椅子と聖書朗読台はタモ桁材。玄関ホールは三位一体を表すステンドグラス（註3）」とあり、聖堂建築への詳細に渡る指示がなされた。また、機能としては聖堂（礼拝室）と司祭館とし、設計方針ではこれらの諸空間がシン

ブルに一体化する事と、祭壇位置を礼拝室隅角部に配置するといった、個性的な設計を目指した。

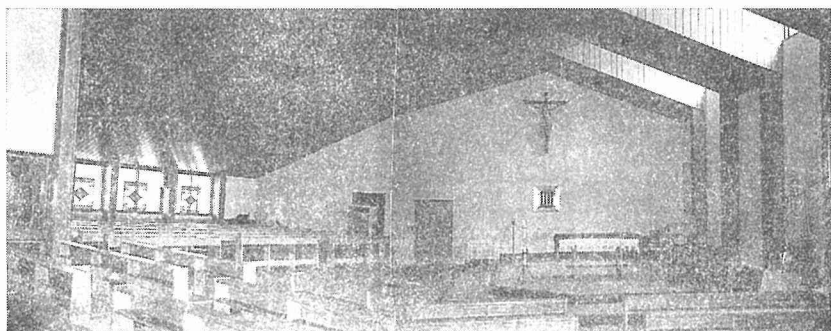
外観での特徴は、その屋根根で切妻屋根北側に高く斜め方向に立ち上げた高窓（トップライト・写真2）であり、立面的には片流屋根のように見えるデザインが施されている。正面の緩やかな勾配を示す切妻屋根の棟には十字架かが置かれ、その妻壁上部には屋根内部を利用した空間への窓があり、高窓側面を除くと左右対称形のファサードであった。東立面は平側となり、水平な棟上に三つの妻壁に高窓が大きく広がり、ステンドグラス（写真3）が現れている。平面形では、礼拝堂と司祭館の二本のL字型平面形を基本とした並列配置を採用し、四部に集会室（冬期礼拝室・台所）を合理的に配置した集中型と片廊下型併用平面形といえよう。最も特徴的な空間は、礼拝室の隅角部に配置された祭壇部分（写真4）であり、礼拝形式は信徒席が祭壇を囲むようにした集中型の採用であった。また司祭館にあっては、片廊下に沿った各部屋の並列配置であるといった点である。

△現聖堂の建物（図3）▽増改築によって鉄骨平家一部二階建となったが、外観での変化は前聖堂正面にあった切妻妻壁が、この改築により垂直壁を高く持ち上げ

たバラベット外壁となり、また玄関廻りも凹凸がなく平坦な箱型の正面形態となった事である。平面形では西側諸室が一体化し、また玄関ホールに階段・便所・事務室が配置されて教会建築として合理的な動線を確保した。

四、大町教会聖堂の形態的変遷への考察

以上により昭和二十五年の仮聖堂から現聖堂への建



写真一4 現聖堂内部 隅角部祭壇（前聖堂同じ 昭和40年建設）

築的変遷について、その形態に視点を置きながら具体的に述べてきたが、ここでは各棟ごとに変化してきた配置・平面・外観正面（立面）形の変遷について考察する。

△各棟の配置（図1）▽ 修道院開設からの大町教会における教会建築は大別すると、二つの特徴的な形成過程があった。それは初期の借地時代、そして敷地購入移転時代で、この経過が各棟の出現に強く影響されたと考えられる。前者にあつては修道会の援助によって資金的に余裕があつたと思われるが、所有者の都合で借地上での建築行為であつた。この事が初期から教会建築としての体裁を合理的に整備出来なかつた理由であり、仮聖堂棟の両側に増築しながら教会機能を確保した変遷とならざるを得なかつた。また、修道院あるいは幼稚園併設といった特殊な機能をも要求された事も影響して、敷地利用としての各棟配置は約四十mという南北に長い棟の出現となつた。後者では、聖堂の移転新築前の昭和三十七年に建てられた幼稚園園舎配置と新築聖堂の位置関係が不明朗であり、敷地購入時からマスタープランが在つたかどうか疑問が残る。すなわち図1で示すように、現聖堂は主道路に面しているが、園舎は聖堂奥に配置されていて導入路がない。従つて、聖堂の北側屋根勾配方向を通路

とせざるを得なく、冬期の落雪への配慮がみられない。こうした配置になつた原因は、恐らく敷地購入時には他に園舎への進入路が確保されていたが、その後の区画変化によつてこうした変則的な棟配置となつた推察する。

△平面形の変遷と聖堂内部▽ 平面形の変遷では、仮聖堂から旧聖堂までの木造建築と新築移転後の鉄骨造とでは基本的な差異があり、前者では細長い長方形平面形で片廊下式で、礼拝・修道院・幼稚園そして司祭空間という複数機能が分離配置となつていた。後者では正方形に近い長方形平面形の集中型で、部分的に片廊下式を用いている。内部機能では礼拝・司祭空間のみで幼稚園・修道院は別棟となつた。

聖堂内部での変遷では、旧聖堂までは長方形平面で正面に祭壇をおき「対面形式」であつたのに対して、新築聖堂ではし字型の平面形で、凹部分の隅角部に祭壇が配置された「集中形式」に変わった。

△外観正面形の変遷▽ 正面形（ファサード）は五回の変遷をみるが、仮聖堂すなわち二階建て切妻屋根平面の形態は、昭和四十年までつづき、前・現聖堂建設時に著しく変わった。

旧聖堂までの平側正面は、二回の増築によつて長い長

方形となったが、基本的には礼拝室棟の平側がその中心であり、切妻屋根の側面と棟上に置かれた尖塔により教会建築としての表情を持たせ、壁面は二層に連続配置されたスリット状の窓で構成されていた。仮聖堂部分も若干の変化が見られ、玄関部分両側丸窓と小屋根棟上の十字架がそれである。また南側増築棟は幼稚園空間であり一般的な木造建築の表情がみられたであろう。

さて、新築移転後の聖堂においては、南側を正面とした穏やかな勾配屋根の断面形をみせた構成であって、高い尖塔を持つ旧聖堂とは異なっていた。しかし距離をおいて見える正面形は、トップライトの斜め勾配屋根が上空に突き出すように伸びて、前面の形態と強烈な差異を示している。この特有な形態は、東立面に顕著に現れていて「トップライト棟」と表現可能なとくに、異様な三棟が飛び出している（写真2）。これらの窓は、内部の高い位置からの礼拝室への明かり取り（写真3）を目的とした断面計画であるが、外部と内部空間の処理がアンバランスになっていた。すなわち、透視図的方向での外観（写真2）は鋸型屋根の「工場建築」の様な形態となり、木工場建築群が周囲に建つ大町教会の立地環境では、工場建築と混同しそうな建物印象となっている。ま

た後の前面玄関廻りの増築での高く水平なバラベツト出現は、正面形をさらに複雑化して側面形態と合わせて、教会建築としての存在を更に不明瞭にしている。

△おわりに▽

旭川の戦後における、旧教での最初の布教拡大として開設された大町教会が建設してきた、五棟の聖堂について述べたが、その変遷は旧敷地内での聖堂建築と現敷地での聖堂では多くの差異がある事が明確になった。もちろん建築は敷地条件に左右される事は言うまでもない。しかし、宗教建築としての基本的な形態があるとするならば、内部機能の極端な変化がなければ、それほど建物自体に変化が生じないと考えられよう。しかし、現実には大町教会の聖堂建築には著しい形態的変遷があり、この原因について考察する必要がある。

旧敷地内での建築は、借地という条件が大きな原因となった。すなわち、修道会の思惑通りにはいかず、諸条件下での聖堂建設であり、購入した建物（仮聖堂）の現状維持を中心とした増改築の変遷でもあった。また、単一教会としての布教活動とともに修道院活動、更に戦後

復興時という社会的条件も加わった事によって、自然発生的な聖堂形態が出現したと考えられる。

しかし、移転新築というそれまでの条件から解放されたの聖堂建築に於いては、大町教会の伝統的教会観と建築上での計画的建設行為が可能となり、そこに初めて神父・信徒の教会形成が具体的に建物を通して語られる聖堂の出現となったのだが、敷地利用あるいは外観形態に見られた多くの計画的な矛盾は、教会建築の建設がいかに難しいかを物語っていると言える。ただ、こうした矛盾が外国人の設計、北海道の地域性を熟知しないでの基本計画だったとするならば、計画への関与の仕方の一つの示唆を与えていると言える。

前・現聖堂建築の手法は、外観では鋸型の屋根が象徴するごとく、山岳地方の教会建築形態であったと考えられ、設計者であるスイス人神父の意図に、北海道の中央に立地する旭川の環境と山岳地方の風景の一致があったとするならば、敷地環境に関する未熟さがこうした形態を用いた原因と推察する。しかし逆に考えるならば、敷地条件を熟地してからの設計では、この計画は無理な事となるわけで、その意味では個性的意匠とも言えよう。

ただ、この聖堂での新しい提案は、礼拝室形態にあり

祭壇を隅角部に配置し、L字型に信徒席を設けて囲みの空間とした演出である。これまでの形態は長方形平面で対面形式での礼拝室空間であったが、信徒の中に宗教的セレモニーを深く浸透させる手法が用いられている。

今日までの旧教における教会建築は、その宗教儀式を重視する伝統から一つの形態、すなわち対面形式が用いられていたと考えられるが、大町教会に見られる信徒中心の礼拝空間演出への移行は、その伝統的な教会観に対して、逆に新しい教会観を生み出す要因ともなった。すなわち、大町教会での新しい礼拝室形態の出現は、教会建築による宗教的意図の一つの変遷とも言えよう。

また前稿では、旭川五条教会の教会建築について考察したが、大町教会と同様に昭和三十年代以降に聖堂形態の著しい変化があった。この変遷過程をみる限り、旧教に於いては昭和三十年代以降、教会建築への基本的な考え方が変化したとも言え、また、北海道での寒冷地という厳しい自然環境を考慮した、教会建築への接点的年代であったとも考えられる。

本稿にあっては、戦後の混乱期に創立した旭川大町教会を対象とした考察であったが、今後に於いても道内の他の教会建築を対象として研究を進める。

なお本稿発表のための調査研究に協力していただいた
大町教会のヒラリオ・シュミット神父とシスター・信徒
の柴田公兄・棚田薫兄に感謝し、また実測調査では北海
道東海大学大学院生千里政文君・同学生後藤俊之君、資
料整理等での建築史意匠研究室分室の本田まり子さん
にお礼を申し上げます。

一九九一年四月十日完稿

注

(1) 北海道基督教学会編「基督教学」第一七・二一・二四・二十
五号参照。

(2) 足利工大研究取録第三号（一九七七）四十三頁参照。

(3) カトリック大町教会編「献堂二十五周年記念誌」（一九七五）
参照。

(4) 旧聖堂以前の建物の復元は、同教会付属その幼稚園RC造
園舎新築時（昭和五十六年）に旧園舎解体（旧聖堂使用）に
ともなう現状平面図を手掛かりとして作成し、立面形は残さ
れていた当時の写真・資料により復元実施。